

|             |  |
|-------------|--|
| 氏 名         | ご うんほう<br>WU YUNFENG   |
| 学位(専攻分野)    | 博 士 ( 学 術 )  |
| 学 位 記 番 号   | 博 甲 第 1 1 0 3 号  |
| 学位授与の日付     | 令和 5 年 9 月 25 日  |
| 学位授与の要件     | 学位規則第 4 条第 1 項該当   |
| 研 究 科 ・ 専 攻 | 工芸科学研究科 デザイン学専攻  |
| 学 位 論 文 題 目 | 東周金文の現代漢字書体デザインへの応用に関する研究  |
| 審 査 委 員     | (主査)教授 中野 仁人<br>教授 平芳 幸浩<br>准教授 井戸 美里<br>准教授 西村 雅信<br>公益財団法人泉屋博古館 学芸員 山本 堯 |

## 論文内容の要旨

本研究は、春秋戦国時代の青銅器に見られる東周金文の表現を調査分析し、表現の特徴を明らかにしたうえで、そのデザイン性に着目し、現代の書体デザインへの展開の可能性を提案するものである。

東周金文は主に礼器銘文、貨幣文字と兵器銘文に見られ、非常に広範囲に分布し、考古学上の発見も多い。金文は主に晋系、齊系、楚系、秦系の 4 つに分けられ、晋系、齊系、楚系は革新派、秦系は伝統派、楚系は改革派の代表であった。本論文では、特に楚系と秦系に着目し、詳細に研究を進めている。その中でも楚系の流れを汲む中山王陵三器銘、秦系の秦公簠銘を取り上げ、その結体、筆法、章法の側面で格律設計の研究を進めた。そのうえで、それら東周金文の要素を整理し、現代書体デザインに応用した二つの書体を制作して、今日のデザインへの展開を提示している。

なお、中国国家博物館、上海博物館、河北博物院、廣東省博物館、浙江省博物館、長沙博物館などの現地調査研究を通し、直接の資料を入手し、東周金文研究の基礎となる材料及び根拠を整理したうえで、現代の日本の書体デザインの方法論を参照しながら研究と制作を進めている。

第 1 章でまず研究の背景と東周金文を巡る先行研究について言及し、本論文の研究方法について述べ、古代の文字並びに書道と現代の書体デザインの関係および展開の可能性について示している。

第 2 章では、古代中国の情勢に照らし合わせ、特に春秋戦国時代の青銅器文化が栄えた歴史的背景について解説し、書体の発展の歴史について概観している。そしてその中で書の原点であり、多岐にわたって発展した金文書体の流れについて述べている。

第 3 章と第 4 章では具体的に東周金文の詳細な分析を行っている。春秋時代中期以降、書体革新は楚国に代表される装飾文字と秦国に代表される実用文字という二つの方向に分かれることになった。楚系金文の流れをくむ中山王陵三器銘と秦系金文の秦公簠銘を抽出し、分析を行う。第 3 章では、まず、中山国青銅器文様の詳細な調査により、中山王陵三器銘は楚系金文に属する楚系鳥蟲書から派生した文字であることを明らかにした。そこから、中山王陵三器銘の金文の特徴を、筆法、結体と章法の三つの側面から、その造形性を探っている。そのうえで、中山王陵三器銘の字形の収集、計測、計算を行い、字面の比率を整理し、文字の重心の分布範囲と構造の比率関係を確定した。また、その結果に基づいて、統一的な文字構造を可能にするための補助グリッドを作成する。同様に、銘文拓本において、文字を構成する各筆画の形態特徴を微細に研究し、書体のエレメントを制作した。これにより、金文をもとにした書体デザインの方向性を策定

し、基盤を築いた。また同時に中山王陵三器銘の表現の印象を『二十四詩品』に言及されたキーワードをもとに分析し、書体の芸術性を確認している。

第4章では秦系金文についての分析を進める。秦系金文は同じく青銅器上の銘文であっても楚系金文と大きく異なり、常に『史籀篇』をベースにしている。秦は東南諸国から遠く離れている西方に位置し、諸国との交流はほとんどなく、文化的に比較的孤立していた。したがって、秦の文字は他国の影響を受けずに、『史籀篇』を継承し、可読性を高めることができた。このことから、秦系金文は小篆文字の形成の基礎とも言える。これまでに発掘された春秋時代秦国の銘文入り青銅器は少なく、代表的な秦公鐘、秦公罍および秦公簠は、いずれも銘文の冒頭に秦公という文字があり、それが名前の由来になっている。秦公簠銘の筆画は太さが均一であるが、曲直、湾曲度、傾斜度、方円などの面において、微妙な変化に富んでいる。結体は端正で、文字の視認性を重んじ、装飾性を抑えている。また、活字鋳型の枠は仮想ボディに相当し、文字の規範性を高める役割を果たし、章法がより謹厳で整然としていることを明らかにした。

第5章と第6章では、東周金文の調査分析をもとに、そこから割り出された書体設計法を軸に新たに制作した書体についての説明を行なっている。第5章で中山王陵三器銘のエレメントと構成法の分析をもとに『古韻中山王体』、第6章で秦公簠銘をもとに『古韻秦公体』という二つの書体を制作し、またその活用例についても詳細に紹介している。

第7章では、上記2書体がデザインコンペ等で多数受賞したことを述べ、尚且つ中国の書道家やデザイナー等の客観的評価、意見を紹介している。

そして第8章では現代の書体デザインの方向性と今後の金文を基にした書体設計の可能性と展開についてまとめている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、古代中国の青銅器のうちの東周金文に着目し、その表現の特徴を詳細に分析したうえで、デザインの要素を検証し、現代の書体デザインへの展開を試みる研究である。

本論文には以下のように評価すべき点が存する。

第一に、東周金文はこれまで、考古学の視点での研究と、書学、書道史学の研究で書風を分析することに焦点が当てられてきたが、グラフィックデザインの観点からその特徴を分析した研究は例を見ない。本研究は古代の書体と現代のデザインの橋渡しをする画期的な研究である。

第二に、春秋戦国時代の青銅器の歴史的変遷と傾向の調査、分析という社会的側面と、文字自体のエレメントおよび構造の分析という二つの側面を持ち合わせていることである。すなわち、書体の歴史を系統立てて論じただけでなく、造形的観点から東周金文に言及し、その表現手法と時代性を結び付けている。そして、グラフィックデザイン史において、これまで詳細な先行研究のなかった金文の書体デザインというジャンルを明確に示し、その成立から確立に至る過程をデザインの視点を絡めて体系化したことは極めて独自性が高いといえる。そのために広範かつ膨大な資料収集をおこなった上で、綿密に分析を進めるという手法は評価に値する研究である。

第三に、金文を筆法、結体、章法の三つの側面から客観的かつ数学的に分析し、そのデザイン性を探るという方法論を提示した点である。それにより感覚的ではない文字の造形性が明らかになった。

そして第四に、今回制作された2種の『古韻体』は独自の個性を確立し、今日一般的に使用され

る明朝体やゴシック体などの本文書体とは異なり、本来の文字が持つ芸術性と民族性を保持し、現代の画一的な書体デザインのあり方に一石を投じるものとなった。

上記のように、本論文は歴史的、造形的に広範囲にわたる慎重かつ緻密な調査作業を踏まえて、独自の視点からの分析、考察を展開したもので、博士学位論文として十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも以下の査読付の4論文としてすでに公表され、さらに研究をもとに制作した作品は、以下のコンペで受賞している。

- ① 呉雲峰、中野仁人：「楚系鳥蟲書のデザイン性に関する研究」中国科学技術協会『設計』第34巻136頁-139頁（2021）
- ② 呉雲峰：「物象から心象風景へ：中山王陵三器銘の書風を探索」書学書道史学会『書学書道史研究』第32号15頁-28頁（2022）
- ③ 呉雲峰、中野仁人：「秦公簠銘のタイポグラフィへの応用に関する研究」河北省文化和旅游芸術協会『大衆文芸』第550巻34頁-37頁（2023）
- ④ 呉雲峰、中野仁人：「秦公簠銘の章法のデザイン性に関する研究」河北省文化和旅游芸術協会『大衆文芸』第555巻33頁-35頁（2023）
- ⑤ 呉雲峰：「古韻中山王体」中国東方文化創意賞金賞（2020）、台湾国潮文化デザイン賞銅賞（2020）、香港当代デザイン賞銅賞（2020）、日本タイポグラフィ年鑑入選（2022）